

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K03124

研究課題名（和文）がんの終末期の治療選択における意思決定のスタンスに応じた意思決定支援方法の開発

研究課題名（英文）Development of a decision support method according to the stance of decision making in terminal treatment choice of cancer

研究代表者

塩崎 麻里子（Shiozaki, Mariko）

近畿大学・総合社会学部・准教授

研究者番号：40557948

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：一連の研究によって、死と直面する終末期の意思決定において後悔しないためには、文化社会的背景に適合する感情調整が重要であることが確認された。日本人が死と向き合う際に、陰陽思想に基づく、受容することでの感情調整が有効であることが示された。また、「人生の価値志向性尺度」が開発され、人生の価値が明確になることは、人生を受け入れ、後悔を減らすことにつながる可能性が示唆された。これらの結果から、人生の価値志向性を通して自身の人生の価値と向き合い、理想の感情状態に向かう道筋を確認した上で、有効な感情調整方略を促すことができる具体的な意思決定支援プログラムの開発の必要性について提言した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

感情調整方略の文化差に関する研究において、日本的な感情調整方略を示したことは学術的意義がある。また、人生の価値志向性を通して自身の人生の価値と向き合い、理想の感情状態に向かう道筋を確認した上で、有効な感情調整方略を促すことができる意思決定支援は新しい発想であり、今後のこの分野の発展可能性を高めたといえる。そして、がん患者と家族の意思決定支援において、何を選ぶかだけでなく、どのように選ぶかその過程を支援する上で、人生の価値志向性を用いて、価値を明確化するという新たな支援方法を提言したことは、社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：A series of studies confirmed the importance of culturally and socially appropriate emotion regulation in the face of death in order to avoid regret during end-of-life decision making. Emotional regulation through acceptance, based on the Yin-Yang philosophy, was shown to be effective for minimizing/preventing regret when facing death among Japanese. In addition, we had developed the “Life Value Orientation Scale” and had shown that valuing life may lead to acceptance of life and a reduction in regret. Based on these results, we proposed the need to develop a decision-making support program. This specific program can promote effective emotion regulation strategies, after confirming the path toward the ideal emotional state, by confronting the value of one’s life through life value orientation.

研究分野：臨床心理学

キーワード：意思決定 後悔 がん患者 高齢 価値 文化

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

人生の締めくくりを決定づける選択は、誰にとっても後悔したくないものであろう。統計上は2人に1人が生涯のうちに罹患するというがんの場合には、終末期に、最期まで辛い治療を続けてがんと闘うか、治療を中止しQOLを重視する代わりに治癒を諦めるかという治療選択を迫られることが多い。本研究では、この苦痛を伴うがんの終末期の意思決定における後悔を制御することに着目した意思決定支援方法を開発することを目指す。特に、これまでの意思決定支援の理論的背景がすべて欧米であることに問題意識をおき、まずは文化社会的背景が人生の後悔の感じ方とその制御方略に及ぼす影響を検討し、人生において培われてきた意思決定のスタンスに応じて意思決定を支援できるプログラムを開発することを最終目的とする。がんの好発年齢は高齢で、現在、日本における高齢がん患者と家族への支援が大きなトピックとなっているため、本研究でも、高齢がん患者を対象とした終末期の意思決定支援方法の開発を目指すこととした。

### 2. 研究の目的

文化社会的背景によって培われてきた意思決定のスタンスとして、人生の価値志向性に着目し、個人の人生の価値志向性に応じた意思決定を支援できるプログラムを開発する上で、必要な3つの研究を実施した。それぞれの目的は以下の通りであった。

(1) 研究1の目的は、がん患者の遺族を対象にしたインタビューデータを再解析し、日本的な後悔制御方略の特徴を明らかにすることであった。

(2) 研究2の目的は、日常的に老いや死と向き合い対処し続けている対象として、高齢者施設の介護職員を対象にインタビュー調査を実施し、老いや死と向き合うことで経験する否定的感情の日本的な調整方略の特徴を明らかにすることであった。

(3) 研究3の目的は、研究1,2の結果から、日本の文化社会的背景を考慮した意思決定のスタンスの軸となる人生の価値志向性の構成概念を同定し、それを測定するための尺度を開発することであった。また、人生の価値志向性に関して、若年世代、中年世代と比較した際の、高齢世代における特徴を明らかにし、さらに、人生の価値志向性が、明確になっていることが、人生に対する後悔にどのように影響しているかを検討することであった。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究1

科研費(H20-がん臨床・若手-023)で収集されたがん患者の遺族の面接データを再解析して、がん患者の特に日本的な後悔制御方略の特徴を質的に抽出した。対象となったのは、がんに対する治療を行っていて治療を中止、もしくは中断を経験した遺族37名であった(女性23名、男性13名;平均年齢59.11±11歳;範囲36-79歳)。面接は約90分程度、半構造的に実施された。質問内容は、治療を中断、中止した時の状況、意思決定時からお看取りを経て、今に至る気持ちの移り変わり、振り返ってきて納得のいく後悔の少ない意思決定のために重要だと思うことについてであった。分析は、心理学を専門とする2名が質的内容分析を実施した。音声データの逐語録を把握し、後悔制御方略にあたりと考えられる箇所をすべて抜き出し、内容の類似性に従ってカテゴリー化した。この作業で判断が分かれた場合には、納得いくまで議論して、双方の合意が得られる形で最終カテゴリーを決定した。さらに、Zeelenberg(2006)の後悔理論に従って、後悔制御方略を、目的焦点型、決定焦点型、代替選択焦点型、感情焦点型の5領域に整理した。また、後悔の有無と、これらのカテゴリーの有無に関して、 $\chi^2$ 二乗分析を実施して検討した。

#### (2) 研究2

特別養護老人ホームの常勤介護士13名で(男性6名、女性7名;平均年齢29.3歳;平均勤続年数6.5年;身近な人との死別経験あり11名)に着目し、質問紙を併用した半構造化面接調査を実施した。面接と面接の前後の質問紙への記入をあわせて、60分前後を要した。質問紙には、属性を尋ねる項目とレジリエンス尺度(森ら,2002)、面接内容に関する自由記述が含まれていた。面接では、老いや死と向き合う上で経験した苦痛を伴った感情、その感情との向き合い方、自身の人生の価値について尋ねた。面接データは、ICレコーダーの記録をもとに、作成した逐語録を用いて、研究者2名が質的内容分析を行った。インタビューの中心となる「否定的な感情」「対処方略」に着目し、重要な発言を抽出し、内容の類似性によって整理し、カテゴリー化した。その後、2名で作成したカテゴリーと分類に相違がないように、意見が一致するまで協議を繰り返して、内容の妥当性を検討した。さらに、介護責任者に、現場での経験とカテゴリー化された内容に乖離がないか内容の確認を依頼し、最終的なカテゴリーを決定した。

#### (3) 研究3

日本人における意思決定のスタンスの軸となる概念を測定するための尺度を開発し、高齢世代の特徴を明らかにするためには、若年世代、中年世代を含めた調査に参加できる全世代の回答が必要である。そこで、インターネットを介して、参加者を募集してオンライン調査を実施した。回答に不備があったり、回答の信頼性が確認できなかったデータを削除し、分析対象となったのは、若年世代(20-30代)605名、中年世代(40-50代)611名、老年世代(60-70代)400名の3世代計1616名であった。なお、本調査を実施する前にコンビニエントな若年世代大学生484名(男性244名、女性240名;平均年齢19.1±1.0歳)を対象に予備調査を行い、項目選定

や項目表現の修正を行った。質問項目は、属性を尋ねる項目に加え、意思決定のスタンスの軸となる概念項目 36 項目と、人生の価値明確化尺度 4 項目、意味理解尺度 10 項目、後悔項目 3 項目であった。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究 1

質的内容分析の結果、後悔を制御するための方略は、意思決定当時 21 カテゴリー、死別から現在に至るまで 24 カテゴリーに分類された。これまでの後悔制御方略に関する先行研究ではみられなかった特有のカテゴリーとして、「妥協点を探る」「医療者との信頼関係を築く」「第三者の経験を生かす」「大局的見地からの諦観」といった方略が得られた。これらのカテゴリーは、相互協調的な我が国の文化的背景を反映したものであり、高齢期の感情の調整において、文化社会的背景を念頭に意思決定のゴール設定を考えていく必要があることが確認された結果といえる。また、カイ二乗検定の結果、後悔がないと回答した遺族は、後悔があると回答した遺族に比べて、意思決定後に感情焦点型の制御方略を多く用いていることが示され ( $\chi^2(1)=5.46, p<.05$ )、後悔しない意思決定支援を行っていく上で、正解の選択をすることを目指し何に決めるかという視点以上に、どのように、なぜその選択をするかに焦点をあて、感情調整をしやすい環境や決め方の支援を行うことが重要であることが示唆された。

##### (2) 研究 2

老いや死に向き合う上で経験した否定的な感情に関する発言を質的内容分析によって整理した結果、後悔(12名)、理想と現実の葛藤(6名)、喪失感や寂しさ(6名)、ショック(5名)、苛立ち(4名)、重責感(3名)、慣れへの恐れ(2名)、無力感(2名)の 8 つのカテゴリーに分類された。

また、これらの辛い感情の調整方略は、16 個のカテゴリーに分類され、それらはさらに「今を大切に」、「ひとつの視点に固執しない」、「感情に振り回されない」、「心理的離脱」、「巨視的視点をもつ」の 5 つの大カテゴリーに分類できた。特に、日本的な文化社会的背景を反映していると思われるカテゴリーは、2 つある。まずは「ネガティブな側面を否定せずに多面的に受け入れる(ひとつの視点に固執しないの下位カテゴリー)」であり、感情調整方略の文化差における文脈でも指摘されるように、物事には良い面・悪い面の両方が存在するという東アジアの陰陽思想を反映しているといえる。また、「人との関係性で得たものを別の他者に循環させる(巨視的視点を持つの下位カテゴリー)」は、自身を世界の一部ととらえて、大きな流れの中に自身を位置付けて、生命や人生の循環性を受け止めていく世界観は、東洋的は非分割の特性といえる。

得られたカテゴリーを用いて、介護士のレジリエンス得点との関連性を、コレスポネンズ分析を用いて検討したところ、老いや死への向き合い方は、自己統制の仕方(コントロール感焦点型・調和焦点型)と物事を捉える視点(具体的視点・大局的視点)の 2 軸で説明することができた。また、レジリエンス高群は、大局的視点で物事を捉える傾向があることが示唆された。したがって、老いや死といった一見解決できない課題に向き合う上で経験する否定的感情を調整していく上で、人間関係の相互性や循環性に関する視点は、ネガティブな側面を否定せずに、そのまま受け入れることは、日本人にとって重要であるといえる。

##### (3) 研究 3

研究 1 の結果から、終末期に死と直面した際の際の意思決定において、重要なキーワードは、感情調整であることが示唆された。また研究 2 の結果によって、これまでの感情調整研究の文脈で協調されてきた西洋的な物事のポジティブな側面を再評価する方略や感情を抑制しない方略だけでなく、東洋的な大局的視点で物事をみて、ひとつの視点に固執しないで、感情を受け入れるといった方略の存在が明らかとなった。

まず、この東洋的な非分割の視点は、文化的自己観の違いを生み出す。文化的自己観とは、Markus & Kitayama(1991)が提唱した概念で、東洋的な自己を環境や他者との関係性の中に位置づける相互協調的自己観と西洋的な自己を環境や他者とは独立した存在として位置づける相互独立的自己観によって、個人差を概念的に整理できる。

次に、西洋の論理思想に対して、東洋なネガティブなものもポジティブなものも表裏一体である陰陽思想という伝統がある。そのため、「世界は流動的で常に変化している、そしてそれぞれの事象・事物が互いに結びついている、したがって矛盾は至るところで起きている」という世界観が形成される。そのため、短期的な満足や高揚を求めるよりも、長期的な目的達成ややりがいを求める傾向が強いという幸福志向性の違いがみられる。

これら 2 つの視点を取り入れて文化的自己観×幸福志向性の 2 軸によって説明される「人生の価値志向性」が、重要な場面における意思決定のスタンスの軸となると仮説をたて、研究を進めることとした。

類似概念を扱った先行研究と自由記載による項目集めの結果作成された 44 項目を使った予備調査を実施し、本調査で使用する 37 項目を決定した。この 37 項目を用いて本調査を実施し、探索的因子分析を行った結果、因子構造の明確さ、因子負荷量等から、26 項目に選定された。さらに、各年代で探索的因子分析を行った時に、因子が移動した 4 項目を削除し、最終的に 22 項目の尺度を開発した。検証的因子分析の結果からも、これらの因子構造が妥当であることが確認され、文化的自己観と幸福志向性の 2 軸を想定した 4 領域(相互独立・相互協調×快樂・目的)

の尺度が作成された。

老年世代の特徴を明らかにするために、各世代を層化して、4領域の得点を用いたクラスター分析を行った。その結果、若年世代と中年世代は4つの類似したバランスのクラスターが得られた(1:全領域高群, 2:全領域平均群, 3:全領域低群, 4:相互独立快樂高群)。老年世代は、3つに分類されクラスター1・2・3と類似のバランスのクラスターが見られたが、クラスター4にあたるバランスの群は見られなかった。つまり、若年・中年世代までは、相互独立快樂(自身が自由であり、個としての権利が守られていること)が重要だと感じるタイプが存在するが、老年期になると個としての権利や自由を大切にす相互独立快樂が高いタイプが消失し、4領域によらず、人生の価値を高く認識するタイプとそうではないタイプに分かれていくといえる。

また、これらの割合を年代ごとに比較したところ、若年世代は、全領域高群の割合が少なく、高齢世代では、その割合が多いことが明らかとなった。一方で、年代ごとの4領域の人生の価値志向性得点を比較したところ、全ての領域において、老年期群は、若年・中年期群に比べて、価値志向性得点が低かった。これらのことから、加齢とともに、人生の価値志向性は偏りがなくなる一方で、その規模は縮小していく可能性が示唆された(独立やりがい  $F(2, 1697)=255.61, p=.00, p^2=.23$ ; 相互協調やりがい  $F(2, 1697)=245.55, p=.00, p^2=.22$ ; 相互協調快樂  $F(2, 1697)=141.91, p=.00, p^2=.14$ ; 相互独立快樂  $F(2, 1697)=304.81, p=.00, p^2=.27$ )。

さらに、人生の価値について考える頻度(価値思考)、自身の人生の価値の明瞭さ(価値明確)、人生の価値を日常の行動に反映させている程度(価値行動)、人生の価値を大切に思っている程度(価値大切)に関して、年代差がみられるか検討したところ、価値思考と価値大切には有意差はみられなかったが、価値明確と価値行動には有意差がみられた( $F(2, 1697)=6.16, p=.00$ ;  $F(2, 1697)=9.55, p=.00$ )。多重比較の結果、老年世代は、若年世代と中年世代に比べて、考える頻度や大切に思う程度は変わらないものの、より自分の人生の価値が明確になっており、それを日常生活に反映させて行動できていることがわかった。

最後に、人生の価値明確化と後悔の関係について検討を行った。後悔があると回答したのは、80.2%であった。後悔の強さを弱い1点 - 非常に強い5点の範囲で尋ねたところ平均は、 $3.82 \pm .95$ となった。価値の明確化4項目を独立変数、人生の意味づけと後悔の強さを従属変数として、ステップワイズ法を用いた重回帰分析を行ったところ、独立変数は、価値明確と価値行動の2尺度が最も適合度が高いことが示唆された。そこで、価値明確と価値行動から、人生の意味づけを介して、後悔に影響を及ぼすモデルを検証したところ、最終的に、価値明確が価値行動を促し( $\beta=.51, p=.00$ )、日常生活の中で自身の人生の価値に従った行動を取れることが人生の意味づけを高め( $\beta=.57, p=.00$ )、その結果、後悔が弱まる( $\beta=-.29, p=.00$ )というメカニズムを示すことができた。これらのことから、人生における後悔を減らすためには、自身の人生における価値を明確にし、それに従った行動を取ることが重要であるといえる。

#### (4) 研究1, 2, 3の結果を踏まえた総合的な成果

質的研究によって、重要な意思決定に後悔しないためには、感情調整が重要であり、従来の肯定的再評価方略、抑制方略だけでなく、受容方略が、日本人にとっては有効である可能性が示唆された。文化社会的背景の違いによって、理想的な感情状態(ideal affect)が異なることが明らかとなっており、個人の理想的な感情状態に達するために有効な感情調整方略を支援することは、意思決定後の後悔を減らすことに繋がることを提言できた。

また、量的研究によって、人生の価値志向性の加齢による変化と、人生の価値の明確化と後悔の関連性を示すことができた。老年世代は、若年世代や中年世代に比べて、価値志向性自体は縮小するものの、価値の領域は広範にわたるものが増え、価値が明確になっており、それを日常生活において行動として反映させられていることが明らかとなった。自身の人生の価値が明確になれば、何を大切に時間を過ごすことが自分にとって重要であり、理想的な感情状態でいられることに繋がるかといった道筋が明確となる。したがって、その道筋を明確にする作業を支援することができれば、重要な正解のない意思決定において、何のためにその選択を行うのかという意味付けが可能となり、後悔を減らすことができると推測される。

今後は、一連の研究で明らかとなったことが、がん患者と家族が直面している終末期の意思決定の場においても適用できるかを確認する必要がある。また同時に、人生の価値志向性を通して自身の人生の価値と向き合い、理想の感情状態に向かう道筋を確認した上で、有効な感情調整方略を促すことができる具体的な意思決定支援プログラムの開発のための基礎研究の蓄積が求められる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 塩崎麻里子・佐藤望・増本康平	4. 巻 -
2. 論文標題 認知症高齢者の家族介護者が代理意思決定場面で経験した後悔に関する質的調査研究：後悔を引き起こす要因と後悔に影響する選択の仕方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 老年社会科学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Nakazato Kazuhiro, Shiozaki Mariko, Hirai Kei, Morita Tatsuya, Tataru Ryuhei, Ichihara Kaori, Sato Shinichi, Shimizu Megumi, Tsuneto Satoru, Shima Yasuo, Miyashita Mitsunori	4. 巻 13
2. 論文標題 Medical Staff's Support for Family Members Who Verbally Communicate Feelings to Patients in Palliative Care Units: A Survey of Bereaved Family Members	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Palliative Care Research	6. 最初と最後の頁 263～271
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2512/jspm.13.263	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Mori Masanori, Yoshida Saran, Shiozaki Mariko, Morita Tatsuya, Baba Mika, Aoyama Maho, Kizawa Yoshiyuki, Tsuneto Satoru, Shima Yasuo, Miyashita Mitsunori	4. 巻 21
2. 論文標題 “What I Did for My Loved One Is More Important than Whether We Talked About Death”: A Nationwide Survey of Bereaved Family Members	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Palliative Medicine	6. 最初と最後の頁 335～341
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1089/jpm.2017.0267	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Nakazato Kazuhiro, Shiozaki Mariko, Hirai Kei, Morita Tatsuya, Tataru Ryuhei, Ichihara Kaori, Sato Shinichi, Shimizu Megumi, Tsuneto Satoru, Shima Yasuo, Miyashita Mitsunori	4. 巻 27
2. 論文標題 Verbal communication of families with cancer patients at end of life: A questionnaire survey with bereaved family members	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Psycho-Oncology	6. 最初と最後の頁 155～162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/pon.4482	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kouhei Masumoto, Mariko Shiozaki, Nozomi Taishi.	4. 巻 15
2. 論文標題 The impact of age on goal-framing for health messages: The mediating effect of interest in health and emotion regulation.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 1~16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0238989	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Shiozaki, M., Masumoto, K., & Harada, K.
2. 発表標題 Can daily conversation between elderly couples reduce the anxiety about future?: Examination using the longitudinal pare data focusing on emotional expression in daily conversation.
3. 学会等名 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masumoto, K., Harada, K., & Shiozaki, M.
2. 発表標題 Does emotion regulation of older adults have an impact on their spouse's psychological well-being and distress? : One year follow up study.
3. 学会等名 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塩崎麻里子・濱崎洋嗣
2. 発表標題 介護士のレジリエンスから学ぶー心理学×アートのアプローチの可能性
3. 学会等名 アートミーツケア学会2019年度大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masumoto, K., Zhuang, X., Shiozaki, M., & Harada, E.
2. 発表標題 Can Elderly Adults Avoid the Anchoring Effect If They Are Forewarned and Motivated to Avoid the Effect?
3. 学会等名 The Gerontological Society of America 2018 Annual Scientific Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮地由佳・塩崎麻里子・恒藤暁・森田達也・木澤義之・升川研人・宮下光令・志真泰夫
2. 発表標題 がん患者の介護者の介護中の離職および死亡
3. 学会等名 第25回日本緩和医療学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮地由佳・塩崎麻里子・恒藤暁・森田達也・木澤義之・升川研人・宮下光令・志真泰夫
2. 発表標題 がん患者の遺族のアドバンス・ケア・プランニング（ACP）が他者との関係性や死生観に与える影響
3. 学会等名 第25回日本緩和医療学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 増本康平・山本健太・原田和弘・塩崎麻里子
2. 発表標題 高齢期の記憶の役割：自己定義記憶に着目して
3. 学会等名 日本老年社会科学会第62回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 増本康平・塩崎麻里子・中里和弘	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 160
3. 書名 高齢者心理学 第五章 保健・医療	

1. 著者名 塩崎麻里子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東洋経済新報社	5. 総ページ数 316
3. 書名 医療現場の行動経済学 第七章 遺族の後悔	

〔産業財産権〕

〔その他〕

妻が乳がんと言われたら... <a href="http://bcf-support.paflie.net/">http://bcf-support.paflie.net/</a>
---

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------